

内藤湖南中国絵画題跋研究序説

－基礎史料の整理および初歩的考察－

石 暁 軍

はじめに

本稿は、今まで学界で見落とされており、詳しく検討されていない近代日本における東洋史の泰斗であった内藤湖南（内藤虎次郎、字は炳卿、湖南は号。1866-1934）の中国絵画に関する漢文題跋についての初歩的考察である。具体的には、関係する基礎的な史料を整理したうえ、その全貌について考察を加えてみたいと考える。

（一）先行研究と問題の提起

内藤湖南の中国絵画史研究について言えば、一般的に先ず湖南没後4年後に、嗣子の内藤乾吉氏により編集し出版された内藤湖南著『支那絵画史』（弘文堂、1938年）を挙げられる（以下は「内藤中国絵画史」と略称）。当該著書は、1922年～1923年京都帝国大学（以下は「京大」と略称）文学部史学科における湖南による特殊講義の筆記¹に基づき1926年5月～1931年12月にかけて『仏教美術』誌に連載された漢以前から明代までの内容²を中心として、更に1915年8月京大夏期講座の講義筆記「清朝の絵画」をはじめとする数編の論著を加えて刊行されたものであるが、当時の日本における従来の中国絵画史とは異なり、「南宗正統論」や「尚南貶北論」に基づいて展開されてきたため、出版後はよく注目されており、再版と増刷も重ねてきた³。特に1962年（昭和37）に弘文堂より「限定版」として再版された後、1969～1976年にかけて筑摩書房より『内藤湖南全集』が出版された際にもその第13巻（1973年）に収められている⁴。さらに1975年に筑摩書房より単行本が刊行され、2002年に筑摩書房より「ちくま学芸文庫」の一種として、現代の読者に読みやすい文庫本も出版された⁵ことにより、この内藤中国絵画史はいっそう一般的にも広く知られるようになっていく。

一方、中国では、上述した内藤湖南の著書の中国語訳本『中国絵画史』が2008

年に出版され⁶、さらに2020年12月に、「日本中国絵画研究叢書」の一種として上記の『中国絵画史』のほか、『内藤湖南全集』第13巻に収録されている湖南の「絵画史雑纂」部分の中国語訳を増補し上海書画出版社より刊行された⁷。それに伴い、中国語圏においても湖南の中国絵画史研究に関心を持ってきているようである。

ところが、研究史を整理してみると、今まで湖南の中国絵画史に関する研究は、主に美術史研究者の間で展開されており、中国史研究者とくに内藤湖南研究者があまりそれに目を向けていないのが現状であろうと思われるが、これまでの研究については、下記の二つの傾向が見られるようである。

一つ目は、美術史分野の研究においては、実作品を踏まえて画家の画品や画論を含む絵画史を研究しなければならないため、中国絵画史に関する湖南の先駆的な業績が認められるが、時代的制約で湖南が中国各時代の全ての絵画名作が見られなかったため、絵画史を構築するには不十分であったこと、および湖南が選んだ作品には偽作があり「玉石混淆」との欠陥もあったことはよく指摘されている（米澤嘉圃⁸、鈴木敬⁹、古原宏伸¹⁰、曾布川寛¹¹、小川裕充¹²、宮崎法子¹³、宇佐美文理¹⁴諸氏の論著を参照）。その関係によるかと思われるが、湖南の中国絵画史研究については、研究者の間に敬遠されているようであり、専門的な研究論著があまり見られない¹⁵。

二つ目は、今まで日本における湖南の中国絵画史論についての論評と紹介は、主に湖南の中国絵画史に関する著書に基づいて行われているが、湖南による数多くの中国絵画に関する漢文題跋が見落とされてきたのが現状である。また前述したように、内藤湖南『中国絵画史』の中訳本の出版に伴い、近年、中国においても湖南の中国絵画史研究に関する研究論著が現れてきた¹⁶が、湖南の中国絵画に関する漢文題跋が依然として殆ど利用されていない。

ところで、周知のように、中国絵画に関する湖南の漢文題跋は、湖南の中国絵画史研究を考察する時に不可欠の材料と礎石とも言うべきものだけでなく、日本では古今独歩と言っても過言ではない¹⁷。それは、湖南の中国絵画史論に対する意義は言うまでもなく、湖南の東洋文化史研究ないし内藤史学全体の理解にも重要な意味があると思われる。しかし残念ながら、管見の限りでは、今まで公表された湖南の中国絵画史関係の研究論著には、『内藤湖南全集』第14巻に収録されている湖南の漢文題跋に関する系統的な研究が見られない。

中国絵画史に関心を持っているが絵画史の研究者ではない私が、僭越と思いつながりながら敢えてこの問題に取り組んでいるのは、これまで詳しく検討されていない湖南の漢文題跋の全貌および価値を明らかにするほか、更にそれらの漢文題

跋に支えられている湖南の中国絵画史研究を、内藤史学という大きな視野の中で考えるべきではないかと考えるからである。具体的に言えば、内藤史学の中心の一つとも言うべき「唐宋変革論」をはじめとする東洋史論との関連性という視点より、試みに湖南の中国絵画史研究を位置づけて再考してみたいと考えている。

上述したことを踏まえて湖南の中国絵画に関する漢文題跋研究の第一歩として、本稿では、まず中国絵画に関する湖南の漢文題跋に関わる基礎的な整理作業を行い、試みにその全貌すなわち全体像を描き出してみたいと思う。

(二) 中国絵画に関する湖南の漢文題跋の全体像

I. 湖南の中国絵画に関する漢文題跋の収録状況

湖南の漢詩文がすべて『内藤湖南全集』第14巻（筑摩書房1976年）に収録されており、①『寶左盒文』、②『玉石雜陳』、③『湖南文存』十六巻附『補遺』一卷、④『湖南詩存』不分巻附『湖南小稿』という四つの部分から構成されている。その内、①と②は著者である内藤湖南が生前に選定され刊行されたことがある¹⁸が、③と④は湖南の嗣子である内藤乾吉が『内藤湖南全集』を編纂された際に新たに整理・編纂された作品である。また乾吉氏の『内藤湖南全集』第14巻「あとがき」によると、③と④の選定と編纂は実にすべて湖南の弟子であった神田喜一郎に任せたと¹⁹。

そのほか、近年、中国においても湖南の漢詩文集の出版があり、2009年に上記した『内藤湖南全集』第14巻の内容を全て含んだ上、さらに日本を代表する書論の研究誌『書論』（書論研究会）13号（1978年）から17号（1980年）にかけて掲載された「内藤湖南全集補遺」の漢詩文13点を、「湖南文存新補」として増補し、「日本漢文著作叢書」の一種として、『内藤湖南漢詩文集』が広西師範大学出版社より出版された²⁰。

その中、中国絵画に関する湖南の漢文題跋について言えば、主に『内藤湖南全集』第14巻所収の『湖南文存』に所収されているが、中でも巻八は最も多くて69点が所収されているほか、各巻に散見しているものもあり、巻七の4点と『湖南文存補遺』の1点および『湖南文存新補』の2点を加えて全部で76点を有することが確認できる。

また、『清朝書画譜序』（『寶左盒文』所収）、『爽籟館欣賞序』・『董盒藏書畫譜序』・『九華印室鑑藏畫錄序』・『澄懷堂書畫目錄序』（『湖南文存』巻二所収）を

はじめとする湖南の漢文による中国書画関係の画譜や藏画録および書画目録の序文、および中国書画と密接な関係がある南画についての漢文題跋(『湖南文存』巻十には18点が所収されている)を入れてみれば、湖南による中国絵画関係の漢文史料は、合計で百点を超えることになる。

なお、『湖南詩存』に散見する中国絵画に関する湖南の「題画詩」、および漢文による湖南の書論²¹も多く存在している。それらは何れも湖南の中国絵画史論に関わる重要な基礎的資料とも言えよう。

そこで基礎史料整理の一環として、ここでは先ず中国絵画関係の漢文題跋が最も多く所収されている『湖南文存』巻八を取り上げて、元々の配列順のままそれぞれ「題跋名称」・「執筆時期」・「画家」・「時代」・「収蔵家(当時)」・「内藤中国絵画史における図版と記載」・「備考」という欄目に分けて、試みに整理し初歩的に校訂と検証を行った。その結果は下記の一覧表の通りである。

内藤湖南中国絵画題跋研究序説

内藤湖南中国絵画題跋一覧表（『内藤湖南全集』第14巻所収の『湖南文存』巻八より）

〔※凡例：No = 『湖南文存』巻八の配列順。（p00） = 内藤湖南全集13巻のページ。大美 = 大阪市立美術館。〕

| No | 題跋名称 | 執筆時期 | 署名 | 画家 | 時代 | 収蔵家（当時） | 内藤中国絵画史における 図版と記載 | 備考 |
|----|---------------------|--|-------------------------------|--|----------|--|-------------------------------------|----------------------|
| 1 | 唐閻立本 畫古帝王 圖卷跋 | 昭和七年 (1932) 三月 | 内藤虎 書於恭 仁山莊 之寶許 篋 | 閻立本(601- 73) | 唐 | 博文堂主人 = 原田 悟朗(1893-1980) 玻璃精印 | 図17(p55) 画家関係記載14箇所 以上 | |
| 2 | 李成王曉 讀碑窠石 圖跋 | 昭和二年 (1927) 九月廿八 日/壬申 (1932) 七月 | 虎 虎又記 | 李成(919-67) 王曉。生卒年 不詳。10世紀 中後期 | 五代 宋初 | 近江阿部氏老龍館 = 阿部房次郎 (1868-1937) 蔵 | 図31(p97) 画家関係記載(李成 17, 王曉2箇所) | 大美 012 |
| 3 | 董北苑群 峯霧雪圖 卷跋 | 大正八年 (1919) 七月 | | 董源(?-962) | 五代 南唐 | 浪華齋藤君 = 齋藤 悦蔵(董龔) (1872?) 蔵 | ×図なし 画家関係記載31箇所 | |
| 4 | 李營邱夏 景晴嵐圖 卷跋 | 甲子(1924) 六月 | | 李成(919-67) | 五代 宋初 | 齋藤君董龔 = 齋藤 悦蔵(董龔)(1872 -?) 蔵 | ×図なし No.2 参照 | |
| 5 | 范中立秋 山蕭寺圖 卷跋 | 昭和辛未 (1931) 六月 | 書於恭 仁山莊 之漢學 居内藤 虎 | 范寬(約950- 1032) | 北宋 | 董龔先生 = 齋藤悦 蔵(董龔)(1872?) 蔵 | 図32(p98) 画家関係記載3箇所 | |
| 6 | 荆浩秋山 瑞靄圖跋 | 昭和六年 (1931) 十二月 | 書於恭 仁山莊 之寶郵 篋 | 荆浩(850?- 911?) | 五代 後梁 | 阿部君爽籟館 = 阿 部房次郎(1868- 1937)蔵 | 図29(p87) 画家関係記載13箇所 | 伝荆 浩 大美 115 |
| 7 | 巨然山居 圖軸跋 | 丁卯 (1927) 十一月 | 虎 | 巨然。生卒年 不詳。10世紀 前中期 | 五代 南唐 | 董龔 = 齋藤悦蔵 (董龔)(1872?)蔵 | 図40(116) 画家関係記載11箇所 | |
| 8 | 巨然江山 歸棹圖跋 | 癸亥 (1923) 七月 | | 巨然。生卒年 不詳。10世紀 前中期 | 五代 南唐 | 藤井君靜堂 = 藤井 善助(1873-1943) 蔵 | ×図なし No.7 参照 | |
| 9 | 郭河陽雙 松水閣圖 軸跋 | 甲子 (1924) 六月 | | 郭熙(約1000- 1087) | 北宋 | 蔚堂 = 林蔚堂(林 平造。生卒年不 詳。大正-昭和前 期奈良の実業家) 蔵 | ×図なし 画家関係記載5箇所 | |

| | | | | | | | | |
|----|------------|------------------------|-----|----------------------|------|---|--|---------------------|
| 10 | 關仝待渡圖跋 | 甲子 (1924) 六月 | | 關仝(同), 生卒年不詳, 10世紀前期 | 五代後梁 | 齋藤氏董盒 = 齋藤悅藏(董盒)(1872-?)藏 | 図30(p91) 画家関係記載5箇所 | |
| 11 | 許道寧秋山蕭寺圖卷跋 | 癸亥 (1923) 六月 | | 許道寧, 生卒年不詳, 11世紀中期 | 北宋 | 藤井氏霽靄莊 = 藤井善助(1873-1943)藏 | 図34(p99) 画家関係記載1箇所 | 跋文脱漏アリ |
| 12 | 李龍眠瀟湘卧游圖卷跋 | 甲子 (1924) 四月 | | 李公麟(1049-1106) | 北宋 | 菊池君惺堂 = 菊池晉二(1868-1935)藏 | ×図なし ※図47(p129)は李公麟五馬圖卷 旧清内府藏 画家関係記載12箇所 | 東坡黃州寒食詩卷跋(湖南文存7)を参照 |
| 13 | 李龍眠靈山聖會圖卷跋 | 丁卯 (1927) 六月廿九日 | | 李公麟(1049-1106) | 北宋 | 齋藤氏董盒 = 齋藤悅藏(董盒)(1872-?)藏 | ×図なし No13参照 | |
| 14 | 僧傳古戲水龍圖卷跋 | 昭和二年 (1927) 九月 | | (釋)傳古, 生卒年不詳。10世紀前期 | 五代 | | ×図なし ×記載なし | |
| 15 | 毛益狗子圖跋 | 丙寅 (1926) 秋分夜 | | 毛益, 生卒年不詳, 12世紀中期 | 南宋 | 林君蔚堂 = 林蔚堂(林平造。生卒年不詳)藏 | 図54(p148) 画家関係記載1箇所 | |
| 16 | 米元暉雲山圖卷跋 | 大正三年 (1914) 冬十一月 | | 米友仁(1074-1153) | 南宋 | 博文堂主人 = 原田悟朗(1893-1980) | 図49(p131) 画家関係記載8箇所 | |
| 17 | 徐崇嗣雙兔圖卷跋 | 癸亥 (1923) 六月 | | 徐崇嗣, 生卒年不詳。10世紀中後期 | 北宋 | 藤井氏霽靄莊 = 藤井善助(1873-1943)藏 | 図38(p111) 画家関係記載3箇所 | |
| 18 | 題易元吉白鵝圖 | 庚午 (1930) 八月 | | 易元吉(? - 1067?) | 北宋 | | ×図なし 画家関係記載1箇所 | 大美017 |
| 19 | 梁楷十六應真圖卷跋 | 大正戊午 (1918) 六月 | 内藤虎 | 梁楷, 生卒年不詳。13世紀前期 | 南宋 | ? 林宗孟司寇 = 林長民(1876-1926)藏(林長民は段祺瑞内閣司法総長(1917)) | ×図なし ※図56(p155)は梁楷友軍書扇圖 旧清内府藏 画家関係記載7箇所 | 大美129 |

内藤湖南中国絵画題跋研究序説

| | | | | | | | | |
|----|---------------------|-------------------|---|--------------------------|----------|--------------------------|---|-------------------------|
| 20 | 夏禹玉墨 筆山水圖 軸跋 | 大正十一年(1922) 八月 | | 夏珪(約1180-1230) | 南宋 | 守屋學士=守屋孝藏(1876-1953)藏 | ×図なし ※図59(p161)は夏珪山水圖 黒田侯爵藏 画家関係記載9箇所 | |
| 21 | 夏禹玉晚 山歸樵圖 軸跋 | 大正十一年(1922) 八月 | | 夏珪(約1180-1230) | 南宋 | 守屋學士=守屋孝藏(1876-1953)藏 | ×図なし No20参照 | |
| 22 | 名賢寶繪 集册跋 | 壬戌(1922) 四月 | | 南宋 理宗(1224-64在位) 他12圖 | 南宋 | 武居君=武居綾藏(1870-1932)藏 | ×図なし 記載なし | 大美 157 |
| 23 | 題管仲姬 采筆蘭花 圖 | 戊辰(1928) 四月 | 虎 | 管道昇(1262-1379) | 元 | ? | ×図なし 画家関係記載1箇所 | 趙孟頫妻 |
| 24 | 管仲姬竹 石小景圖 卷跋 | 壬戌(1922) 四月初二 | | 管道昇(1262-1379) | 元 | 西宮武居君=武居綾藏(1870-1932)藏 | ×図なし No23参照 | |
| 25 | 錢舜舉柴 桑翁圖卷 跋 | 昭和四年(1929) 十二月 | | 錢選(約1239-99) | 宋末 元初 | 徳島芝君=芝彦一?藏 | ×図なし 画家関係記載2箇所 | |
| 26 | 錢舜舉佛 圖澄禪定 圖卷跋 | 昭和五年(1930) 八月 | | 錢選(約1239-99) | 宋末 元初 | 阿部氏爽籟館=阿部房次郎(1868-1937)藏 | ×図なし No25参照 | 大美 130 |
| 27 | 梅華道人 山水册跋 | 己未(1919) 三月 | | 吳鎮(1280-1354) | 元 | 羅叔言參事=羅振宇(1866-1940)舊藏 | ×図なし 画家関係記載6箇所 | |
| 28 | 題梅道人 湖船圖 | 丙寅(1926) 六月 | | 吳鎮(1280-1354) | 元 | 阿部君=阿部房次郎(1868-1937)藏 | ×図なし No27参照 | |
| 29 | 黃大癡畫 卷跋 | 己未(1919) 三月 | | 黃公望(1269-1354) | 元 | 羅叔言參事=羅振宇(1866-1940)旧藏 | ×図なし 画家関係記載4箇所 | 大美 134 黃公望江山幽興圖か? |
| 30 | 題黃大癡 墨筆山水 圖 | 大正十年(1921) 七月 | | 黃公望(1269-1354) | 元 | 有竹齋=上野理一(1848-1919)藏 | 図71(p185)? ※図71黃公望秋山擁翠圖 上野精一藏 No29参照 | |

| | | | | | | | | |
|----|-------------------|---------------|-------|---|----------|----------------------------|---|-----------------------|
| 31 | 方方壺山水圖軸跋 | 大正十二年(1923)六月 | | 方從義 (1302-93) | 元 | ? | 図75(p191) 画家関係記載2箇所 | |
| 32 | 馬文璧幽居圖卷跋 | 昭和癸酉(1933)十二月 | | 馬琬, 生卒年不詳。14世紀中後期 | 元末 明初 | 岡部子爵 = 岡部長景 (1884-1970) 藏 | ×図なし ※図77 (p195) は馬琬夏山欲雨圖 阿部孝次郎藏 画家関係記載3箇所 | |
| 33 | 題倪雲林溪山平遠圖 | 戊辰(1928)四月 | | 倪瓚(1306-74) | 元末 | ? | ×図なし ※図72 (p186) は倪瓚寫杜陵詩意圖 長尾雨山藏 画家関係記載2箇所 | |
| 34 | 宋元合璧畫冊跋 | 癸亥(1923)七月 | | 北宋高懷寶、南宋林椿、劉松年、元王淵等。八圖 | 宋元 | 藤井氏霽齋莊 = 藤井善助 (1873-1943)藏 | ×図なし ※図55 (p149) は劉松年松下高士圖 藤井善助藏 画家関係記載7箇所 | |
| 35 | 題徐幼文畫冊 | 昭和五年(1930)八月 | | 徐賁(1335-93) | 元末 明初 | ? | 図76(p192) 画家関係記載1箇所 | |
| 36 | 李以政渡海羅漢圖卷跋 | 辛未(1931)二月 | 内藤虎 | 李在, 生卒年不詳。15世紀前期 | 明 | 粵南羅君原覺 = 羅原覺 (1891-1965) 藏 | ×図なし ※図84 (p200) は李在雪山水圖 小川陸之輔藏 画家関係記載3箇所 | 羅原覺は 広東省出身の 收藏家 |
| 37 | 明張靖之題岳蒙泉畫松鼠葡萄圖軸題匣 | 甲子(1924)正月 | 内藤虎書 | 張寧, 生卒年不詳。15世紀後期 岳正 (1418-1472) | 明 | (齋藤悦藏(董盒)(1872-?)藏) | 図80(p198) 画家関係記載2箇所 | |
| 38 | 石田六如衡山太湖眞景圖卷跋 | 大正十年(1921)三月 | 湖南内藤虎 | 沈周 (1427-1509)、唐寅 (1470-1523)、文徵明 (1470-1559) | 明 | 副島君 = ? 藏 | ×図なし ※図91 (p208) は唐寅奔壑古松圖 齋藤才三藏 画家関係記載23箇所 (沈11、唐7、文5) | |

内藤湖南中国絵画題跋研究序説

| | | | | | | | | |
|----|------------|---------------|-------------------|----------------|----|--|--|--|
| 39 | 文衡山園池圖冊跋 | 昭和五年(1930)八月 | | 文徵明(1470-1559) | 明 | 安麓邨(1683-1745)、詒晉(成親王永理1752-1823)、錫晉(光緒六年1880進士錢錫晉?)襲藏 | ×図なし No.38参照 | |
| 40 | 沈石田九段錦畫冊跋 | 甲子(1924)六月 | 内藤虎 | 沈周(1427-1509) | 明 | 林君蔚堂=林蔚堂(林平造。生卒年不詳)藏 | ×図なし ※図90(p207)は沈周仿趙千里圖林平造藏 画家関係記載11箇所 | |
| 41 | 沈石田滄浪圖卷跋 | 大正末? | | 沈周(1427-1509) | 明 | ? | ×図なし No.40参照 | |
| 42 | 沈石田吳中勝覽圖卷跋 | 丁卯(1927)十一月 | | 沈周(1427-1509) | 明 | ? | ×図なし No.40参照 | |
| 43 | 沈石田雪谿圖卷跋 | 戊辰(1928)七月 | | 沈周(1427-1509) | 明 | ? | ×図なし No.40参照 | |
| 44 | 沈石田溪雲欲雨圖卷跋 | 己未(1919)三月 | 内藤虎 書於平安橋居之寶左盒 | 沈周(1427-1509) | 明 | ? | ×図なし No.40参照 | |
| 45 | 沈石田畫卷跋 | 大正元年(1912)十一月 | | 沈周(1427-1509) | 明 | ? | ×図なし No.40参照 | |
| 46 | 沈石田齊魯勝蹟圖卷跋 | 丁卯(1927)九月廿九日 | | 沈周(1427-1509) | 明 | ? | ×図なし No.40参照 | |
| 47 | 沈石田齊魯十勝圖卷跋 | 辛未(1931)十二月 | 書於恭仁山莊之寶許篈 | 沈周(1427-1509) | 明 | 博文堂主人=原田悟朗(1893-1980)藏 | ×図なし No.40参照 | |
| 48 | 藍田叔山水冊跋 | 庚午(1930)八月 | | 藍瑛(1585-1666) | 明末 | ? | ×図なし ※図129(p292)は藍瑛仿倪山水圖 齋藤才三藏 画家関係記載2箇所 | |

| | | | | | | | | |
|----|------------|-----------------------|-------------------|---------------------|----------|-------------------------|---|----------|
| 49 | 藍謝青畫卷跋 | 己未 (1919) 十一月卅日 | | 藍深、生卒年不詳。藍瑛孫。17世紀前期 | 明末 清初 | ? | ×図なし 記載なし | |
| 50 | 仇十洲飲中八仙圖卷跋 | 己巳 (1929) 臘月 | | 仇英(?-1552?) | 明 | 齋藤氏董盒=齋藤悦藏(董盒)(1872-?)藏 | ×図なし ※図130(p313), 図131(p314), 図135(p318)は仇英聽琴圖上野精一藏。またpp317-323「仇英聽琴圖」文 画家関係記載14箇所 | |
| 51 | 董文敏書畫合璧冊跋 | 昭和六年 (1931) | 書於恭仁山莊之寶郵籙内 藤虎 | 董其昌(1555-1636) | 明 | 李公博=李宗瀚(1770-1832)舊藏 | ×図なし ※図92(p209)は董其昌仿倪山水圖芝彦一藏。図136(p321)と図137(p324)は董其昌蔡文姬畫像上野精一藏。またpp323-327は「董其昌蔡文姬畫像」文 画家関係記載16箇所 | 現在は台北故宮藏 |
| 52 | 董文敏山水圖跋 | 丁卯 (1927) 六月 | | 董其昌(1555-1636) | 明 | ? | ×図なし No51参照 | |
| 53 | 無款墨筆山水畫卷跋 | 大正九年 (1920) 七月 | | 明人仿董源作 | 明 | 中西耕石(1807-84)舊藏 | ×図なし 記載なし | |
| 54 | 顧禹功畫冊跋 | 壬子 (1912) 十二月 | | 顧殷(1612-?) | 明 | ? | ×図なし 画家関係記載1箇所 | |
| 55 | 題八大山人畫山水冊 | 丙寅 (1926) 九月 | | 朱耷(1626-1705) | 清 | 林蔚堂(林平造。生卒年不詳)藏 | ×図なし ※図104(p230)は朱耷山水圖阿部孝次郎藏 画家関係記載4箇所 | |
| 56 | 題八大山人書畫冊後 | 昭和庚午 (1930) 八月 | | 朱耷(1626-1705) | 清 | 林蔚堂(林平造。生卒年不詳)藏 | ×図なし No55参照 | |

内藤湖南中国絵画題跋研究序説

| | | | | | | | | |
|----|------------|--------------|---------------|-------------------------------------|------|--------------------------|---|--------------------|
| 57 | 石濤畫册跋 | 昭和二年(1927) | | 釋原濟(通称道濟 1641-1718) | 清 | 播之伊藤氏 = ? 藏 | ×図なし ※図99(p223)は釋道濟寫東坡詩意圖阿部孝次郎藏 画家関係記載10箇所 | |
| 58 | 石濤石溪畫跋 | 昭和二年(1927)六月 | | 釋原濟(通称道濟 1641-1718)、釋髡殘(1612-約1692) | 清 | ? | ×図なし ※図100(p224)は釋髡殘報恩圖 住友寛一藏 原濟を除いて画家関係記載4箇所 | |
| 59 | 苦瓜和尚采筆山水册跋 | 昭和己巳(1929)十月 | 恭仁山莊主人觀畢而書 | 釋原濟(通称道濟 1641-1718) | 清 | ? | ×図なし No57参照 | |
| 60 | 龔半千畫册跋 | 昭和二年(1927)六月 | | 龔賢(1618-89) | 清 | ? | ×図なし ※図103(p227)は龔賢摸米南宮雲山圖羅振玉藏 画家関係記載1箇所 | |
| 61 | 王仲初畫跋 | 乙卯(1915)重三 | 湖南内藤虎題 | 王建章, 生卒年不詳。17世紀前中期。 | 明末 | 廉南湖 = 廉泉(1868-1931) 舊藏 | ×図なし 記載なし | 王建章は福建泉州出身。1649年来日 |
| 62 | 王煙客江山蕭寺圖卷跋 | 昭和二年(1927)九月 | 内藤虎書于恭仁山莊之漢學居 | 王時敏(1592-1680) | 明末清初 | 大和林君蔚堂 = 林蔚堂(林平造。生卒年不詳)藏 | ×図なし ※図93(p215)は王時敏仿黃子久山水圖富岡益太郎藏 画家関係記載8箇所 | 現在は文化庁所有 |
| 63 | 王麓臺晴巒環翠圖卷跋 | 戊辰(1928)七月 | | 王原祁(1642-1715) | 清 | ? | ×図なし ※図96(p218)は王原祁山水圖 小川睦之輔藏 画家関係記載10箇所 | |
| 64 | 題王麓臺畫卷 | 昭和庚午(1930)八月 | | 王原祁(1642-1715) | 清 | ? | ×図なし No63参照 | |

| | | | | | | | | |
|----|------------|---------------------|-------------|---|---|--------------------------|--|--|
| 65 | 惲南田山水册跋 | 庚午 (1930) 八月 | | 惲格 (1633-1690) | 清 | ? | ×図なし ※図98 (p220) は惲格花卉圖 阿部孝次郎藏。図128 (p286) は惲格秋林圖 齋藤才三藏 画家関係記載14箇所 | |
| 66 | 錢稼軒畫册跋 | 丁卯 (1927) 十月 | | 錢維城 (1720-1772) | 清 | 廣瀨先生 = ? 藏 | ×図なし ※図110 (p240) は錢維城山水圖 山本悌二郎藏 画家関係記載1箇所 | |
| 67 | 張晴嵐離火文明圖卷跋 | 甲子 (1924) 六月 | 内藤虎 | 張若靄 (1713-1746) | 清 | 林蔚堂 (林平造。生卒年不詳) 藏 | ×図なし 記載なし | |
| 68 | 鄒小山百菊卷跋 | 丁卯 (1927) 二月 | 内藤虎 | 鄒一桂 (1686-1772) | 清 | | ×図なし 記載なし | |
| 69 | 書陳楓階載書歸里圖後 | 甲子 (1924) 十二月 | 在巴黎作 内藤虎 | 陳宸書, 生卒年不詳。乾隆壬子年 (1792) 舉人。陳籙 (1877-1939) 曾祖。 | 清 | 陳任先公使 = 陳籙 (1877-1939) 藏 | ×図なし 記載なし | |

II. 「内藤湖南中国絵画題跋一覧表」からみる中国絵画に関する漢文題跋の全貌

以下では、上の「内藤湖南中国絵画題跋一覧表」を通じて、湖南の中国絵画に関する漢文題跋の全体像について初歩的に考察してみたい。

この一覧表を通じて、おおよそ現時点で確認できる中国絵画に関する湖南の漢文題跋の全貌を把握することができると思うが、紙幅の関係で詳しく分析と考察は今後に譲ると考えるので、ここでは先ず初歩的な所見のみを提示していきたい。

(1) 絵画題跋の配列順について

「内藤湖南中国絵画題跋一覧表」は、一応『湖南文存』巻八の順により配列しているが、そもそも編纂者であった神田喜一郎氏による編纂・配列の意図お

よび基準が明記されていないため、再検証する必要がある。というのは、神田喜一郎の配列によれば、『湖南文存』巻八は基本的には湖南の鑑識で考えられた絵画作品（画家）の時代によるものであったと見られるが、そうでもなかったものも見られる。

例えば、No.5の「范中立秋山蕭寺圖卷跋」とNo.9の「郭河陽雙松水閣圖軸跋」は何れも北宋時代の作品であるので、No.10の「關仝待渡圖跋」の後に配列すべきであると考えられる。また、No.14の「僧傳古戲水龍圖卷跋」は五代の作品であり、北宋時代の作品の前に入れるべきであり、No.15の「毛益狗子圖跋」、No.16の「米元暉雲山圖卷跋」は南宋時代の作品として、北宋時代のNo.17「徐崇嗣雙兔圖卷跋」とNo.18「題易元吉白鵝圖」の後ろに配列すべき、明末清初のNo.61「王仲初畫跋」とNo.62「王煙客江山蕭寺圖卷跋」は清朝の諸画家の後ろに配列した方が妥当であろうと考えられるので、さらに詳しく検証したうえ整理しなければならぬであろう²²。

(2) 題跋の対象とする絵画作品の時代分布について

湖南の題跋の対象とする作品の時代分布から見れば、全69点の絵画題跋は次の通りである。

・唐：1点

No.1「唐閻立本畫古帝王圖卷跋」

・五代（五代宋初を含む）：8点

No.2「李成王暎讀碑窠石圖跋」、No.3「董北苑群峯霧雪圖卷跋」、No.4「李營邱夏景晴嵐圖卷跋」、No.6「荆浩秋山瑞靄圖跋」、No.7「巨然山居圖軸跋」、No.8「巨然江山歸棹圖跋」、No.10「關仝待渡圖跋」、No.14「僧傳古戲水龍圖卷跋」

・北宋：7点

No.5「范中立秋山蕭寺圖卷跋」、No.9「郭河陽雙松水閣圖軸跋」、No.11「許道寧秋山蕭寺圖卷跋」、No.12「李龍眠瀟湘卧游圖卷跋」、No.13「李龍眠靈山聖會圖卷跋」、No.17「徐崇嗣雙兔圖卷跋」、No.18「題易元吉白鵝圖」

・南宋（宋末元初を含む）：8点

No.15「毛益狗子圖跋」、No.16「米元暉雲山圖卷跋」、No.19「梁楷十六應真圖卷跋」、No.20「夏禹玉墨筆山水圖軸跋」、No.21「夏禹玉晚山歸樵圖軸跋」、No.22「名賢寶繪集冊跋」、No.25「錢舜舉柴桑翁圖卷跋」、No.26「錢舜舉佛圖澄禪定圖卷跋」

・元（元末明初を含む）：11点

No.23「題管仲姬采筆蘭花圖」、No.24「管仲姬竹石小景圖卷跋」、No.27「梅華道人山水冊跋」、No.28「題梅道人湖船圖」、No.29「黃大癡畫卷跋」、No.30「題黃大癡墨筆山水圖」、No.31「方方壺山水圖軸跋」、No.32「馬文璧幽居圖卷跋」、No.33「題倪雲林溪山平遠圖」、No.34「宋元合璧畫冊跋」、No.35「題徐幼文畫冊」

・明（明末清初を含む）：21点

No.36「李以政渡海羅漢圖卷跋」、No.37「明張靖之題岳蒙泉畫松鼠葡萄圖軸題匣」、No.38「石田六如衡山太湖眞景圖卷跋」、No.39「文衡山園池圖冊跋」、No.40「沈石田九段錦畫冊跋」、No.41「沈石田滄浪圖卷跋」、No.42「沈石田吳中勝覽圖卷跋」、No.43「沈石田雪谿圖卷跋」、No.44「沈石田溪雲欲雨圖卷跋」、No.45「沈石田畫卷跋」、No.46「沈石田齊魯勝蹟圖卷跋」、No.47「沈石田齊魯十勝圖卷跋」、No.48「藍田叔山水冊跋」、No.49「藍謝青畫卷跋」、No.50「仇十洲飲中八仙圖卷跋」、No.51「董文敏書畫合璧冊跋」、No.52「董文敏山水圖跋」、No.53「無款墨筆山水畫卷跋」、No.54「顧禹功畫冊跋」、No.61「王仲初畫跋」、No.62「王煙客江山蕭寺圖卷跋」

・清：13点

No.55「題八大山人畫山水冊」、No.56「題八大山人書畫冊後」、No.57「石濤畫冊跋」、No.58「石濤石溪畫跋」、No.59「苦瓜和尚采筆山水冊跋」、No.60「龔半千畫冊跋」、No.63「王麓臺晴巒環翠圖卷跋」、No.64「題王麓臺畫卷」、No.65「惲南田山水冊跋」、No.66「錢稼軒畫冊跋」、No.67「張晴嵐離火文明圖卷跋」、No.68「鄒小山百菊卷跋」、No.69「書陳楓階載書歸里圖後」

上述した時代の分布から見れば、唐代の一例を除いて全て五代以降のものであるが、五代・宋元の作品数と明清時代の作品数とは半々でありそれぞれ34点がある。内には、五代の荆浩・關仝・董源・巨然・李成、宋の范寛・郭熙・許道寧・李公麟・米友仁・夏珪・梁楷から、元の吳鎮・黃公望・倪瓚、さらに明の沈周・文徵明・藍瑛・仇英・董其昌、清の朱耷・石濤・石溪・王時敏・王原祁・恽格までの中国絵画史における諸大家の作品が殆ど含まれておるが、中でも特に「新渡り」²³についての「南宗画」²⁴系列の作品に関わる題跋が最も多くて目立っている。これを通じて湖南の関心と注目されたところ、即ち中国文化は「唐末五代から一変したが、殊に社会状態が著しく変化し、これが絵画の変遷状態とも極めてよく一致している」²⁵という中国絵画史に対する湖南の基本的な見方を窺える。

(3) 漢文題跋の執筆時期について

漢文題跋の執筆時期から見れば、1912年（大正元年）十一月のNo.45「沈石田畫卷跋」は最初の題跋であり、1933年（昭和8年）十二月即ち内藤湖南の逝去²⁶五ヶ月前に書かれたNo.32「馬文璧幽居圖卷跋」は最後のものである。

全69点の漢文題跋の内訳は、大正期の15年間（1912-1926）は34点で、昭和期の8年間（1926-1933）は35点である。1926年（大正15年/昭和元年）は湖南が京大から退官された年であること²⁷を考えて、中国絵画に関する湖南の漢文題跋は主に退官後の8年間で完成されたとも言えよう。

その上で、さらに1910年（明治43年）到北京で湖南が中国絵画に対する「開眼」したこと²⁸、と1915年（大正4年）8月に京大の夏季講演会で「清朝の絵画」を講演し翌年に発表されたこと²⁹、とりわけ1922年（大正11年）に京大文学部で中国絵画史講義が行われた同年に、内藤史学の中核とも言うべきである中国史の時代区分に関する著名な論文「概括的唐宋時代観」を発表された³⁰こと、および前述したように、京大から退官された同時に、1922年の中国絵画史講義の内容も9回にわたって『仏教美術』誌で連載されたこと³¹を合わせて考えれば、湖南の中国絵画史研究については、内藤史学の視野において再検討し再定位することも可能ではないかと考える。

(4) 漢文題跋と湖南の中国絵画史著書との関係について

漢文題跋と湖南の『支那絵画史』との関係については、一覧表を通じて比較してみると、まず次のことについては確認できる。

『支那絵画史』においては、湖南の漢文題跋の対象画と一致している絵画としては14点のみであり、次の通りである。

No.1「唐閻立本畫古帝王圖卷跋」、No.2、「李成王曉讀碑窠石圖跋」、No.5「范中立秋山蕭寺圖卷跋」、No.6「荆浩秋山瑞靄圖跋」、No.7「巨然山居圖軸跋」、No.10「關全待渡圖跋」、No.11「許道寧秋山蕭寺圖卷跋」、No.15「毛益獅子圖跋」、No.16「米元暉雲山圖卷跋」、No.17「徐崇嗣雙兔圖卷跋」、No.30「題黃大癡墨筆山水圖」(?）、No.31「方方壺山水圖軸跋」、No.35「題徐幼文畫冊」、No.37「明張靖之題岳蒙泉畫松鼠葡萄圖軸題匣」

一方、『支那絵画史』の中では絵画のみならず、関係記載も見えない題跋が5点あり、次の通りである。

No.53「無款墨筆山水畫卷跋」、No.61「王仲初畫跋」、No.67「張晴嵐離火文明圖卷跋」、No.68「鄒小山百菊卷跋」、No.69「書陳楓階載書歸里圖後」

両者は合わせて19点であり、それ以外の50点は、漢文題跋の対象画と同様の作品がなく或いは異なるが、その画家に関する記載が『支那絵画史』には見られるのである。

上述したことから見れば、八割近くの漢文題跋は湖南の中国絵画史著書とは何らかの相違があるようである。中国絵画史に関する湖南の漢文題跋を整理・精査・検証する価値が正にここにあるのではないかと思う。

おわりに

以上は、大雑把に中国絵画史に関する湖南の漢文題跋の全体像を考察してみたが、未解決の問題はまだ少なくない。最後には今後の課題について記しておきたい。

基礎的な作業としては、何よりも先ず中国絵画史に関する湖南の漢文題跋を検証し、注釈を加える等の形で精査し考証しなければならない。それと同時に、実際は湖南の題跋を有しながら何らかの原因で集録されなかった作品も見られるので、題跋の実物や写真と照合し現存の漢文題跋内容を確認し、転記の漏れや元々集録に漏れた題跋を調査する必要がある³²。また、湖南の題跋により当時の收藏家がだいたい分かるが、その後の作品の流転によって現在の所在については不明も多いので、追跡して調査する必要がある。なお、『内藤湖南全集』をはじめとしての資料集に収録されている湖南の漢文題跋には、湖南の印記が全く転記されていなかったが、対象作品により湖南の印記の使い分けがあったということから考えると、やはり転記する必要もあると思う。上述したことについては、いずれも引き続けて調査しなければならないのであろう。

(※本稿は、研究分担者として科学研究費補助金・基盤研究(B)課題番号20H04412「大正期日本の中国研究と第一次世界大戦前後の世界－内藤文庫所蔵資料を中心に」による研究成果の一部である。)

【注】

¹ 『仏教美術』編集部の源豊宗の筆記により特殊講義の科目名が「支那絵画史講話」であり、1922年度は「支那の絵画」、翌年度は「支那絵画史」であったという。『内藤湖南全集』第13巻巻末の内藤乾吉「あとがき」(pp551-552)を参照。

内藤湖南中国絵画題跋研究序説

- 2 連載はそれぞれ『仏教美術』第6冊(1926年5月)、第7冊(1926年8月)、第9冊(1926年12月)、第11冊(1928年5月)、第14冊(1929年9月)、第15冊(1930年1月)、第16冊(1930年6月)、第17冊(1930年11月)、第18冊(1931年12月)であった。
- 3 『内藤湖南全集』第13巻巻末の内藤乾吉「あとがき」によると、弘文堂版はそれぞれ戦前2回、戦後3回増刷したことがある(『内藤湖南全集』第13巻p551)。
- 4 『内藤湖南全集』第13巻(筑摩書房、1973年)には、弘文堂版の『支那絵画史』のほか、同書に載せなかった湖南による14篇の絵画史関係の文章を「絵画史雑纂」という題目として収録されており、その中で中国絵画史関係のものも含まれている。
- 5 ちくま学芸文庫編集部の文庫本『支那絵画史』p6「凡例」によると、「漢字は新字とし、俗字・別体字などはいわゆる正字に改めた」、「固有名詞やおよび現代の読者に難読と思われる字には新たにルビを付した」という。
- 6 内藤湖南著、欒殿武訳『中国絵画史』(中華書局、2008年)。この訳本は総218ページであり、上述した弘文堂版の『支那絵画史』の中国語訳である。
- 7 内藤湖南著、欒殿武訳『中国絵画史』(上海書画出版社、2020年)。書名は同様であるが、この訳本は総398ページからなり、上述した弘文堂版の『支那絵画史』のほか、「絵画史雑纂」の14篇も含まれており、『内藤湖南全集』第13巻の収録内容の全訳とも言える。
- 8 米澤嘉圃「日本にある宋元画」、「原色日本の美術」第29巻『請求美術(絵画・書)』pp165-166(小学館、1971年)を参照。東京大学教授で日本における中国美術史研究の第一人者であった米澤嘉圃氏の「湖南が“日本になかった宋元画”を動員して、われわれの見たこともない北宋画であれ元の士大夫画であれ、具体的に提示したわけであるが、それは少なくともわが国では、画期的な事柄であったといわねばならない。ただ、先駆者にありがちな欠陥が、湖南の場合にもあったことは否めない。すなわち“日本になかった宋元画”を支持するあまり“日本にある宋元画”は少数の例外を除いて、無視したことか、図版に掲げた作品は玉石混淆で、精選されていないということなどがそれである。」との評価は、美術史学界の代表的な見方であると思われる。
- 9 鈴木敬『中国絵画史』上「序」p3(吉川弘文館、1981年)を参照。
- 10 古原宏伸「日本近八十年来の中國繪畫史研究」を参照。古原氏この論文は元々中国語で発表されたようであり、最初は『民國以來國史研究的回顧與展望研討會論文集』に所収されている(國立台灣大學、1992年)が、後に『新美術』1994年第1号(総第55号)pp67-73(中国美術学院出版社、1994年3月)

にも簡体字が掲載されている。また、同氏「日本の中国画画収蔵与研究」(Kohara Hironobu: “The collection and studies of Chinese painting in Japan”)『朵雲』40号 pp140-142 ((上海書画出版社, 1994年1月)を参照。

- ¹¹ ちくま学芸文庫編集部の文庫本『支那絵画史』pp455-463曾布川寛氏の「解説」を参照。
- ¹² 小川裕充「日本における中国絵画史研究の動向とその展望－宋元時代を中心に」、『美術史論叢』17号(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室、2001年) pp133-158を参照。
- ¹³ 宮崎法子「日本近代のなかの中国絵画史研究」、初出は東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去－日本美術史学100年』(平凡社、1999年)、後に同氏著『中国絵画の内と外』(中央公論美術出版、2020年)に所収。pp233-248を参照。
- ¹⁴ 宇佐美文理『中国絵画入門』pp201-203「参考文献－この本を読まれたあとに」(岩波書店、2014年)を参照。
- ¹⁵ 前掲鈴木敬氏の『中国絵画史』上の「序」(p3)の表現でいえば、「(内藤虎次郎氏による『支那絵画史』が)啓蒙書として、中国絵画史上、同書のはたした貢献を除外すれば現在、単なる古典としての称賛を与えうるにすぎないであろう」。また、前掲宮崎法子「日本近代のなかの中国絵画史研究」(同氏著『中国絵画の内と外』p241)の「湖南らはあまりに伝統的文人そのものに同化しすぎていたため、戦後“近代的”な“科学的”“様式論的”立場の美術史から、文学や精神論に傾きすぎているとして、評価されず無視されてしまう。」を参照。
- ¹⁶ 例えば、董双葉『内藤湖南学術視野中的中国美術史研究』(広西人民出版社、2012年)、周閔「内藤湖南的中国美術研究」(南開大学世界近現代史研究中心編『世界近現代史研究』第11輯pp55-66、社会科学文献出版社、2014年)などが挙げられる。とくに董双葉氏の著書は中国語圏においてこの分野における最初の専門研究書とも言えるが、その大半の内容は内藤史学に関する概説であり、内にも誤読や誤解の箇所は所々見られるほか、また湖南の美術史研究については基本的に前述した湖南の『中国絵画史』に基づいて展開しており、湖南の漢文題跋はあまり利用されていないのが残念である。その他、それ以前にも中訳された阮圓(Wong, Aida Yuen)氏の英文による研究「東洋、民族主義和大正民主：内藤湖南的『中国絵画史』」(『美術館』第2号、広東美術館2002年)、後に王璜生主編『無牆の美術館』pp121-138に再録(広西師範大学出版社2004年)もあったが、湖南の中国絵画史の時代背景に関する論文として

漢文題跋が触れられていない。

- 17 杉村邦彦「内藤湖南と山本二峯－澄懷堂収蔵の中国書画をめぐる一」（『書学書道史研究』第6号、1996年9月）。後に増補され同氏『墨林談叢』（柳原書店、1998年）に再録（pp347-393）を参照。
- 18 『内藤湖南全集』第14巻巻末の内藤乾吉「あとがき」（p751）によると、両方とも湖南が自費印刷・製本し知友に寄贈された。それぞれ『寶左盒文』は大正十二年（1923）、『玉石雜陳』は昭和三年（1928）であった。
- 19 『内藤湖南全集』第14巻pp751-755内藤乾吉「あとがき」を参照。
- 20 『内藤湖南漢詩文集』（印暁峰点校、広西師範大学出版社、2009年）。
- 21 内藤湖南の書論に関する漢文題跋については、『内藤湖南全集』14巻に散見しているほか、陶徳民編著『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承－関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に』（関西大学東西学術研究所資料集刊三十三、関西大学出版部、2013年）pp213-230「内藤湖南の書論」として湖南による漢文序跋や詩文などの書論56点を全集から洗い出されて収録されている。
- 22 作品（画家）の時代は何れも当時の湖南の鑑識によるものであり、中でも後ほどの研究で模写などであったと判明されたものも含まれているが、それは別の問題であるため、ここでは展開しない。
- 23 室町時代以前に中国から日本に伝来した書画は「古渡り」と呼ばれ、江戸時代に唐船で舶載された中国書画は「中渡り」と呼ばれているように、「新渡り」とは、二十世紀の初頭すなわち明治末から大正期や昭和前期にかけて中国の清末民初の政治的混乱を背景に日本に新しく流入された中国書画を指している。
- 24 いわゆる「南宗画」とは、明末の董其昌（1555-1636）が唱えた山水画の流派についての概念として、唐の王維に始まって五代北宋の董源・巨然・元末四大家・明の沈周・文徵明・清初の四王呉惲に至る流れを正統として尊ぶべきであるという主張であるが、それらはプロ画家の「院体画」よりも殆ど文人士大夫によるものであったため、「文人画」とも呼ばれている。内藤湖南がその影響を受けたことは、氏の中国絵画史に関する論説のみならず、漢文題跋作品の時代分布から見ても明らかである。
- 25 内藤湖南『支那絵画史』p93（『内藤湖南全集』第13巻、筑摩書房、1973年）。
- 26 内藤湖南の「年譜」によると、湖南の逝去は昭和9年（1934）6月26日であった（『内藤湖南全集』第14巻p669）。
- 27 上掲「年譜」（『内藤湖南全集』第14巻p668）。
- 28 内藤湖南「清国派遣教授学術視察報告」（『内藤湖南全集』第6巻pp205-206）。

また詳しくは、曾布川寛「近代における関西中国書画コレクションの形成」(国際シンポジウム報告書『関西中国書画コレクションの過去と未来』、2012年)、陶徳民『もう一つの内藤湖南像—関西大学内藤文庫探索二十年』(関西大学出版部、2021年)第一部第3章「中国趣味の形成と清末流出書画の蒐集および発信—『内藤湖南と清人書画—関西大学図書館内藤文庫所蔵品集』序説」を参照。

- ²⁹ 「清朝の絵画」は京大夏季講演会の翌年(1916年)に『大阪朝日新聞』8月8日～19日に連載されていた(『内藤湖南全集』第13巻)。
- ³⁰ 上掲「年譜」(『内藤湖南全集』第14巻p667)。また「概括的唐宋時代観」は1969年出版された『内藤湖南全集』第8巻pp111-119に収録されているが、初出は『歴史と地理』9-5(1922年5月)であった。
- ³¹ 前掲注2を参照。
- ³² 『内藤湖南全集』第14巻所収の『湖南文存』巻八の漢文題跋には、内容転記の漏れがあり、例えば、No11「許道寧秋山蕭寺圖卷跋」については、藤井有鄰館に所蔵されている実物の写真と照合してみると明らかに数十文字の脱漏があったと確認できる。また、澄懷堂美術館の収蔵品には、『内藤湖南全集』に集録されなかった湖南の中国絵画に関する題跋も確認できる(前掲杉村邦彦『墨林談叢』pp383-384参照。柳原書店1998年)が、紙幅関係でこれらについての考察は何れも別の機会に譲る。
-

A Study of Naito Konan's Comment on Traditional Chinese Paintings

Xiaojun SHI

【中文提要】

內藤湖南中國繪畫題跋研究序說 —基礎史料的整理及初步考察—

本文是關於內藤湖南（1866-1934）所撰寫的中國繪畫題跋的一個初步研究。

作為近代日本東洋學的泰斗，內藤湖南在中國繪畫史研究領域也有著很深的造詣，並留下了巨大的足跡。在其去世以後，其生前的相關講座以及所形成的文字被匯總出版，形成了名著《中國繪畫史》。該書不僅在日本，而且隨著近年中譯本的問世，在中文學術圈內也有著很大的影響。歷來有關內藤中國繪畫史的相關研究及介紹均圍繞此展開。但同時人們卻忽視了內藤湖南還同時撰寫了不少有關傳統中國繪畫的題跋。長期以來，這些堪稱是內藤中國繪畫史論之基石的題跋被束之高閣，未能得到研究者們的重視和利用。

鑑於這一狀況，本文調查了散見於《內藤湖南全集》中的中國繪畫題跋以及相關文獻，在此基礎上，重點圍繞《湖南文存》卷八收錄的69篇中國繪畫題跋進行了初步的整理與研究。為力圖勾畫出這些題跋的全貌，本文分別從題跋的排列順序、題跋對象繪畫的時代分佈、題跋撰寫的時期、題跋與內藤中國繪畫史著述的關聯等角度，做了初步的考察分析，提示了基礎史料整理的重要性。同時指出，對於內藤中國繪畫史的研究，不能僅僅局限於美術史的角度，而應該從整個內藤史學體系，尤其是其“唐宋變革說”等理論框架中來加以考察和詮釋。